

“キラリ企業”の現場から

第

119

回

ものづくりは人づくり、まちづくり

有限会社安久工機

人に役立つものを

東急多摩川線の武蔵新田駅^{やすひき}から多摩川方向へ徒歩15分の道のりを、有限会社安久工機(以下同社)ホームページのアクセス案内が分かりやすく同社へ導いてくれる。このこと一つを取ってみても、顧客の目線で、顧客が満足するもの、人の役に立つものを提供しようとする同社の姿勢がうかがえる。

創業者である父の時代から、同社は一品仕様製品や前例のない製品の試作開発に取り組んできた。「ないからあきらめる」のではなく、新しい発想で解決策を見つけ、形にするというチャレンジ精神がDNAとして受け継がれている。用途に応じて素材や加工方法を提案するとともに、製品化後の機能性も考慮しながら、遡って図面を起こす。田中社長は自社を、ものづくりの「便利屋」あるいは「コンビニ」と言い、「安久さんなら何とかしてくれるかもしれない」という段階で顧客の要望に耳を傾けることから始め、結果として「頼んで良かった」となる訳である。

このことが、大学や研究機関を数多く顧客に持つ理由の一つである。同社の仕事は基本的に量産モノを扱わない言わば「一期一会」型であるため、リピート受注は起こりにくいという側面を持つのだが、例えば実験データが取りづらい研究分野の装置開発案件が大学から持ち込まれると、持ち前の発想力でそれを製品化してしまう。その発注元の大学が、取得したデータを用い学会で研究論文を発表すると、その発表を聴講した他の大学関係者が「自分たちにもこのような用途で装置を作ってほしい」と話を持ち込んでくる。

かつて、自身が研究者として大学で博士課程を修了

し、工学博士の学位を持つ田中社長ならではの「間合い」の取り方もあるのかもしれないが、大学や研究機関という事業主体に対する同社の戦略は、一品仕様製品を通じて需要の連鎖を生み出している。

日々是成長

一方で、田中社長が「当社にない」というものがある。

その一つは、意外なことに特殊な加工技術。「当社は基本技術や一般的な機械要素を組み合わせ、製品にするだけ」なのだという。

取材当日、見せてくれた本は「新編 機械の素(機械の素復刊委員会編、理工学社出版)」。初版発行が明治時代末期という古典的名著を1966年に復刻出版した本で、あらゆる機構の基本が示されている。田中社長は今でもこの本を開き、機械工学の基本を学ぶことで、豊かな発想力を維持・向上させている。

もうひとつの「ない」もの。それは「規模の経営」。「新しい設備を入れ、人を増やすようなやり方をする会社ではない」という。

製品開発同様、人づくりにもじっくりと取り組んでいる。今年1月、新たに社員が一人入社した。実は彼女は自社製品「Lapico(ラピコ)」の開発から関わっていた人で、3DCADの操作を覚え、商品化にとっても貢献してくれた。今後の活躍にも期待している。

ここで忘れてならないのは、地域ネットワークの存在である。昭和44年、先代が創業に合わせて大田区の特性を活かした「顔の見えるつながり」を構築したのが始まりで、現在は50社前後で推移している。「加工業者によっ



所狭しと並ぶ機器、工具、部品など



新編 機械の素 機械の素復刊委員会編

公社のさまざまな支援サービスをご利用いただいている元気企業を紹介する“キラリ企業”の現場から。第119回は医療機器、精密機器等のプロトタイプや試作品づくりを行う有限会社安久工機(大田区)をご紹介します。同社は平成5年の公社登録以降、各種相談、受発注登録、ニューマーケット開拓支援事業、インターンシップ受入、ニッチトップ育成支援事業等、幅広く活用されています。

企業
情報



有限会社安久工機
代表取締役
博士(工学)
田中 隆氏

代表者 / 代表取締役 田中 隆
資本金 / 1,000万円 従業員 / 5名
所在地 / 東京都大田区下丸子2-25-4
TEL / 03-3758-3727 FAX / 03-3756-1250
URL / <http://www.yasuhisa.co.jp/>

得意分野は異なる」ため、持ち込まれた案件をよく検討し、同社からネットワーク参加企業へ発注する形を取る。

触図筆ペン「Lapico」

受託加工が主である同社も、試作品づくりの技術が自社製品開発につながっている。

その一つ、視覚障がい者のための触図筆ペン「Lapico」を紹介する。

このペンは、インクの代わりにヒーターで溶かした蜜蝋で線や絵を描く。15秒程度で蝋が固まり、およそ2mmの線が盛り上がる。このわずかな差により、視覚障がいのある人でも描いたものを指先で認識することができる。書き間違えてもヘラで削ることができ、修正も容易だ。

開発のきっかけは、香川県の盲学校の美術の先生のアイデア。生徒に喜びと楽しさを与えたいと「蝋で描くペン」を考え、同社に試作の話が届いた。

当初は毛筆ですぐに固まってしまう、バルブなしで作ったところ蝋がポタポタ落ちてしまうなど開発に苦労したが、3年間の試行錯誤を経て平成18年、試作が完成した。

その後、この商品のネーミングに東京都知的財産総合センター(以下知財センター)が関わることとなる。

平成23年、田中社長が初めて大田区の知財センター城南支援室を訪れた。特許調査や権利化についての相談がきっかけで触図筆ペンを知的財産で保護することの重要性に気づいた田中社長は、知財センターの「ニッチトップ育成支援事業(※)」を活用し、担当アドバイザーとともに商標登録を目指すこととした。

この商品の主なユーザーは視覚障がいを持つ子供た



触図筆ペン「Lapico」

品名の由来
デザイン担当者たちが、開発中に「Pico(ピコ)」と呼び始めた。形状の可愛らしさを音と文字で上手く表現していたため、商標登録しようとしたが、残念なことに先行登録があった。「Pico」を含む名前で登録を目指し調査を重ね「Lapico」にたどり着いた。

ちであり、田中社長が考える名称はどうしても可愛いものばかりになってしまう。

しかし、そのいずれにも既に登録された類似商標があり、どのようにしてオリジナル性を持たせるかに腐心した結果、商品のイメージを表し愛着のもてる「Lapico」という名称を得て出願。平成26年3月に無事登録することができた(登録第5653837号)。この過程を通じて、田中社長は「難産であったが、アドバイザーの支援のもとで出願前調査から出願、登録に至る一連の流れが理解でき、商標権についての考え方の一端を学ぶことができた」と振り返る。

DNA継承

田中社長は地域貢献にも積極的だ。地域小・中学校等の工場実習や社会科見学、出張授業への協力を惜しまない。修学旅行の中学校が、町工場の見学を行程に組み込むことがある。同社は工場の狭さを見てもらい、機械装置を動かし加工のデモンストレーションも行う。

地元へ帰った子供から感想が届くことがある。工場を見て「人の役に立つ仕事に就きたいと思った」と書かれた感想文を受け取った時は「とても嬉しかった」。

常に柔軟な発想でイノベーションを起こし続ける当社と田中社長。

3年後(平成31年)の創業50周年に、何か記念行事を行うのかと質問したところ、「特別なことは何も考えていない。節目を迎えられることは嬉しいが、大事なのは日々の積み重ねだから」と語る。

おそらく同社のDNAはこれからも脈々と受け継がれていく。企業は人なり。社員・顧客・地域と向き合う同社の真摯な姿勢は、より多くの協力者やファンを作り続けていくことだろう。

(知的財産総合センター 濱咲雅人)

(※)ニッチトップ育成支援事業…
知的財産を活用して経営基盤強化を図ろうとする企業を対象に、知財センターアドバイザーが最大3年間、継続的な相談・助言等を行い専門人材の育成や知財管理体制の整備など実践的な支援を行う事業。